

物語の登場人物が自己の有限を超えることは感動を強めるか

乾陽登

指導教員 日道俊之

研究背景

人は物語を読む時にしばしば、感動を感じることもある。その感動を引き起こす要因の一つに、有限の顕現化による価値の見出しがある。有限が顕現化されることにより、その稀少性や過程に価値を見出すことにつながり感動が喚起されるが、物語の登場人物自身の有限を乗り越えた時に感動を強くするかについての研究はまだ行われていない。

研究目的

本研究の目的は、物語の登場人物が自己の有限を超えた時、有限を超えなかった場合よりも感動が強まるかを調べる。加えて、物語の登場人物に強く同一化をしている場合、その登場人物が自己の有限を超えた時に感動がより強くなるかについても検証した。

調査・分析方法

本実験では先行研究を参考に、いじめを受ける小学生主人公が高校生に助けられた後、いじめっ子に反発するシナリオ（実験群）と、距離を取り自己肯定に至るシナリオ（統制群）の二種類を作成した。実験参加者を実験群と統制群の二つの群に分け、それぞれのシナリオを読ませた後、質問紙にて感動・物語への没入・主人公と読者の心理的な距離について回答した。

分析結果

分析の結果、実験群は統制群よりも感動得点が高い傾向にあったものの、感動の強さに有意な差は見られなかった。LRQ-J 尺度得点(物語への没入)と IOS 尺度得点(主人公と読者の心理的距離)の群間の差についても、有意な差は見られなかった。また、実験群・統制群の各尺度の相関分析において、統制群は全ての尺度間で正の相関を示したが、実験群は IOS 尺度のみが他尺度と正の相関を示さなかった。

考察・結論

本実験では、限界を乗り越えるシナリオや登場人物への同一化が感動を高めるかを検討したが、いずれも支持されなかった。一方、実験群では IOS 尺度と他尺度に相関が見られず、主人公がいじめっ子に反発する描写により、参加者との心理的距離が広がった可能性が示唆された。これらを踏まえて本研究は、登場人物が限界を超える描写を伴う感動研究は、既存の尺度のみを用いた測定が難しいことを示唆し、有限の顕現化に関する新しい尺度作成が必要だと考える。